





日文 701737842

132305

信濃久孝

美濃集



卷第廿

中央公論社

萬葉集注釋卷第廿 奥附

昭和四十三年十月二十九日初版 昭和四十七年十二月十五日五版

著者澤瀉久孝^{さわくさひさたか} 發行者山越豐 印刷者北島義俊 製版印刷所大日本印刷株式會社東京

都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地 發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地
地振替東京三四番

定價千五百圓

本文抄造 三菱製紙株式會社

表紙麻布 望月株式會社

口繪^{コロタイ} 株式會社東京寫眞印刷所

製本所 小泉製本株式會社

製函所 加藤製函印刷株式會社

都久波祿乃依由麻能波奈能由等許奈母可奈

之宮母奈比留毛可奈奈部

阿奈例希理可奈麻能可奈奈母依能例奈須米
良美之陸奈如例波波奈之乎

在二首耶賀郡上丁大舍人部子丈

多奈波奈乃多布久可奈乃可奈波奈能都久
波能夜麻手奈比留奈奈米可毛

在二卷助丁乙部廣三

阿奈如良能奈能可多麻波理可奈理奈須河例波
久比由久阿奈志奈母多奈夜波能可流不破乃世奈
比豆永波由之年麻能都奈都奈能依波奈奈利
為豆河例波何波一年母奈海能波能奈奈等奈
乎須可奈利久麻豆奈

在二卷倭武部可奈奈能

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。たとへば遠（類）とあるは元曆本に「袁」とあるが、類聚古集に「遠」とあるによつた事を示し、（大系）豆（元）等（類）短（西）とあるは元曆本に「豆」とし類聚古集に「等」とし、西本願寺本に「𥔷」とあるが、古典大系本に「𥔷」と改めたによつた事を示し、与（考）とあるは諸本に「乎」とあるが、考に「与」の誤とした事に従つた事を示し、（古）九とあるは元や寛に字が落ちてゐるが、古葉略類聚鈔に「九」とあるによつた事を示した。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首についてどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、訓詁の参考にすると共に、古寫本の新たな發見に備へる事も出来ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、十一・七四）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字體（當用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原文又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「礼」(舊三六)、「尔」(舊三六)、「衿」(舊二二)、「与」(舊三六)の如きである。

一、原文の下に注記（類、十六・四五）は類聚古集第十六卷四十五頁の意であり、（古、一・二才）とあるは古葉略類聚鈔第一册二丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の卷は八、九、十、十二と、卷名不明の卷との五册であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられたのに従つた。

一、「西」(右に青)、京(青)、細などヌカシ」とあるは、シの文字が青で書かれてゐる意である。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（八・五五）とあるは卷八にある五三四番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の卷の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下の數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと記した。古事記も中卷、下卷など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段數をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは(享)(群)と注した。「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は(高)と注した。類聚名義抄は(佛、上)(法、中)など注したものは觀智院本である。色葉字類抄(上)(中)など記したものは三卷本(古典保存會刊)であり、伊呂波字類抄(一)(二)など記したものは十卷本(日本古典全集所收)である。一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	文	金澤文庫本萬葉集
金	金澤本萬葉集	王	傳王生隆祐筆本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	嘉	嘉曆(傳承)本萬葉集
天	天治本萬葉集	紀	紀州本(校本に神田本とあるもの)萬葉集
檢天治	伴信友寫檢天治本萬葉集(京都大學所藏)	西	西本願寺本萬葉集
元	元曆(校)本萬葉集	細	細井本萬葉集
類	類聚古集	陽	陽明文庫本萬葉集(京都大學所藏。校本に溫故堂本とある親本)
古	古葉略類聚鈔	矢	大矢本萬葉集
尼	尼崎本萬葉集	京	京大本萬葉集(校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏)
冷	冷泉本萬葉集		

無 無點本萬葉集

附 附訓本萬葉集

寬 寬永本萬葉集

仙 萬葉集注釋
(仙覺抄ともふ)

仙 覺

拾 萬葉拾穗抄

北村 季吟

管見 萬葉集管見

下河邊長流

代 萬葉代匠記

契 沖

(引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、
片カナを用ゐたものは精撰本)

童 萬葉集童蒙抄

荷田 信名

考 萬葉考

賀茂 眞淵

槻 萬葉考槻乃落葉

荒木田久老

玉 萬葉集玉の小琴

本居 宣長

略 萬葉集略解

加藤 千蔭

檜 萬葉集檜婦手

橘 守部

攷 萬葉集攷證

岸本由豆流

古義 萬葉集古義

鹿持 雅澄

註疏 萬葉集註疏

近藤 芳樹

動植正名 萬葉古今動植正名

山本 章夫

美 萬葉集美夫君志

木村 正辭

文字辨證 萬葉集文字辨證

木村 正辭

字音辨證 萬葉集字音辨證

木村 正辭

訓義辨證 萬葉集訓義辨證

木村 正辭

新考 萬葉集新考

(安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書がある
ので、井上氏新考と記したところがあるが、
安藤氏のものは引用するところが少く、單に新
考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍
書保存會刊行のものと國民圖書株式會社刊行の
ものとあり、主として前者によつたが、「増訂」
と記したところは後者によつたものである。)

増、選 增訂本萬葉集選釋 佐佐木信綱

口譯 口譯萬葉集 折口 信夫

總索引 萬葉集總索引 正宗 敦夫

新講 萬葉集新講 次田 潤

新訓 新訓萬葉集 佐佐木信綱

講義	萬葉集講義	山田	孝雄
新解	萬葉集新解	武田	祐吉
新釋	萬葉集新釋	澤瀉	久孝
(伊藤左千夫氏に同じ名の著がある。その場合は著者の名をあげた。)			
私解	萬葉集私解	花田比露思	
全釋	萬葉集全釋	鴻巢	盛廣
古蹟研究	北陸萬葉集古蹟研究	鴻巢	盛廣
難語難訓攷	萬葉難語難訓攷	生田	耕一
秀歌	萬葉秀歌	齋藤	茂吉
評釋篇	柿本人麿評釋篇	齋藤	茂吉
雜纂篇	柿本人麿雜纂篇	齋藤	茂吉
新見	萬葉集新見	森本	治吉
講話	萬葉集講話	澤瀉	久孝
小徑	萬葉集小徑	土屋	文明
古徑	萬葉古徑	澤瀉	久孝
作品と時代	萬葉の作品と時代	澤瀉	久孝
新校	新校萬葉集	澤瀉	久孝
		佐伯	梅友

定本	定本萬葉集	佐佐木	信綱
		武田	祐吉
論究	萬葉集論究 第一輯	松岡	靜雄
染草考	日本上代染草考	上村	六郎
植物新考	萬葉植物新考	松田	修
動物考	萬葉動物考	東	光治
續動物考	續萬葉動物考	東	光治
兵庫篇	萬葉地 兵庫篇	坂口	保
大和志考	萬葉大和志考	增田	德二
山代志考	萬葉山代志考	奥野	健治
全譯	全譯萬葉集	奥野	健治
全注釋	萬葉集全注釋	武田	祐吉
		武田	祐吉

(改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、増訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。)

評釋 萬葉集評釋

(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏の同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)

評釋 評釋萬葉集

佐佐木信綱

私注 萬葉集私注

土屋 文明

(これも著者の名を附した。)

大成 萬葉集大成

平凡社版

歌人の誕生 萬葉歌人の誕生 澤瀉

久孝

古典大系本 古典文學大系本萬葉集

高木市之助
五味智英
大野晋

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學國文學會

山邊道 天理大學國文學研究室

一、引用の諸書の記事は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、祁、古、蘇、刀、努、比、敵、美、賣、用、路

(乙類) 紀、氣、許、曾、止、乃、非、閑、未、米、余、呂

萬葉集注釋卷第二十

萬葉集卷第二十

幸行於山村之時先太上天皇詔陪從王賦和歌之時	天皇御口號一首 (四九二)	一〇
舍人親王應 詔奉和歌一首 (四九四)		一三
天平勝寶五年八月十二日二三大夫等各提壺酒登高圓野聊述所心作歌三首 (四九六—四九七)		一四
同六年正月四日氏族人等賀集于少納言大伴宿祢家持宅宴飲歌三首 (四九六—四九九)		一七
同七日天皇太上天皇皇太后於東常宮南大殿肆宴歌一首 (四九九)		二〇
同三月十九日家持之庄門槻樹下宴歌二首 (四九九、五〇〇)		二一
同廿五日左大臣橘卿宴于山田御母之宅時少納言大伴家持矚時花作歌一首 (五〇四)		二三
詠霍公鳥歌一首 (五〇五)		二四
七夕歌八首 (五〇六—五一一)		二五
同月廿八日大伴宿祢家持作歌一首 (五一一)		二〇
兵部少輔大伴宿祢家持獨憶秋野聊述拙懷作歌六首 (五一一—五二〇)		三一
天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌		

- 二月六日防人部領使遠江國史生坂本朝臣人上進歌七首 (四三—四三七)……………三六
- 二月七日相模國防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麿進歌三首 (四三八—四三〇)……………四五
- 二月八日兵部少輔大伴家持追痛防人悲別之心作歌一首 并短歌 (四三一—四三三)……………四九
- 同九日大伴宿祢家持作歌三首 (四三四—四三六)……………五六
- 同七日駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣人主進歌十首 (四三七—四四〇)……………五八
- 同九日上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙弥麿進歌十三首 (四四一—四四九)……………七〇
- 同十三日兵部少輔大伴家持陳私拙懷歌一首 并短歌 (四五〇—四五二)……………八六
- 同十四日常陸國防人使大目正七位上息長真人國嶋進歌十首 (四五三—四五七)……………九三
- 同日下野國防人部領使正六位上田口朝臣大戸進歌十一首 (四五八—四六〇)……………一〇三
- 同十六日下總國防人部領使少目從七位下縣犬養宿祢淨人進歌十一首 (四六一—四六九)……………一一四
- 同十七日兵部少輔大伴家持作歌三首 (四七〇—四七二)……………一二九
- 同十九日大伴家持爲防人情陳思作歌一首 并短歌 (四七三—四七五)……………一三一
- 同廿二日信濃國防人部領使進歌三首 (四七六—四七八)……………一三六
- 同廿三日上野國防人部領使大目正六位下上毛野君駿河進歌四首 (四七九—四八二)……………一三九
- 同廿三日兵部少輔大伴宿祢家持陳防人悲別之情歌一首 并短歌 (四八三—四八五)……………一四三

同廿日武藏國部領防人使掾正六位上安曇宿祢三國進歌十二首	(四三—四四)	一五二
昔年防人歌八首	(四三—四三)	一六五
三月三日檢校防人勅使并兵部使人等同集飲宴作歌三首	(四三—四五)	一七一
昔年相替防人歌一首	(四六)	一七四
先太上天皇御製霍公鳥歌一首	(四七)	一七五
降妙觀應 詔奉和歌一首	(四八)	一七六
冬日幸于靱負御井之時內命婦石川朝臣應 詔賦雪歌一首	(四九)	一七七
上總國朝集使大掾大原真人今城向京之時郡司妻女等餞之歌二首	(四九、五〇)	一七九
五月九日兵部少輔大伴宿祢家持之宅集飲歌四首	(四九—五〇)	一八二
同月十一日左大臣橘卿宴右大辨丹比國人眞人之宅歌二首	(五〇—五一)	一八五
十八日左大臣宴於兵部卿奈良麿朝臣宅歌三首	(五一—五二)	一八七
八月十三日在內南安殿肆宴歌二首	(五二—五三)	一九〇
十一月廿八日左大臣集於兵部卿橘奈良麿朝臣宅宴歌一首	(五三)	一九一
天平元年班田之時使葛城王從山背國贈降妙觀命婦等所歌一首	(五三)	一九二
降妙觀命婦報贈歌一首	(五三)	一九三

天平勝寶八歲丙申二月朔乙酉廿四日戊申太上天皇太后幸行河內離宮經信

以壬子傳幸於難波宮也三月七日於河內國伎人鄉馬國人之家宴歌三首(四四七—四四九)……………一九四

廿日大伴宿柵家持依興作歌五首(四四六—四四八)……………一九八

喻族歌一首并短歌(四四七—四四八)……………二〇四

大伴宿柵家持臥病悲無常欲修道作歌二首(四四六、四四九)……………二一二

同家持願壽作歌一首(四四七)……………二一四

冬十一月五日少雷夜兵部少輔大伴宿柵家持作歌一首(四四七)……………二一四

八日讚岐守安宿王等集於出雲掾安宿奈杼磨之家宴歌二首(四四七、四四八)……………二一五

兵部少輔大伴宿柵家持後日追和出雲守山背王作歌一首(四四七)……………二一七

廿三日集於式部少丞大伴宿柵池主之宅飲宴歌二首(四四七、四四八)……………二一八

智努女王卒後圓方女王悲傷作歌一首(四四七)……………二一九

大原櫻井眞人行佐保川邊之時作歌一首(四四六)……………二二〇

藤原夫人歌一首(四四九)……………二二一

作者未詳歌一首(四四〇)……………二二三

三月四日於兵部大丞大原眞人今城之宅宴歌一首(四四八)……………二二三

播磨介藤原朝臣執弓赴任悲別歌一首 (四六)	二二三
勝寶九歲六月廿三日於大監物三形王之宅宴歌一首 (四六)	二二四
大伴宿祢家持歌二首 (四六、四六) (西)	二二七
天平寶字元年十一月十八日於內裏肆宴歌二首 (四六、四六)	二二八
十二月十八日於大監物三形王之宅宴歌三首 (四六、四六)	二三〇
年月未詳歌一首 (四六)	二三三
廿三日於治部少輔大原今城真人之宅宴歌一首 (四六)	二三四
二年春正月三日王臣等應 詔旨各陳心緒歌二首 (四六、四六)	二三四
六日內庭假植樹木以作林帷而爲肆宴歌一首 (四六)	二三九
二月於式部大輔中臣清麿朝臣之宅宴歌十首 (四六、四六)	二四〇
依興各思高圓離宮處作歌五首 (四六、四六)	二四六
屬目山齋作歌三首 (四二、四二)	二五〇
二月十日於內相宅錢渤海大使小野田守朝臣等宴歌一首 (四二)	二五二
七月五日於治部少輔今城真人宅錢因幡守大伴宿祢家持宴歌一首 (四二)	二五四
三年春正月一日於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌一首 (四二)	二五五